

印西地区環境整備事業組合次期中間処理施設整備事業

地域振興策検討委員会

先進地視察報告

日 時：平成 28 年 2 月 18 日（木）

訪問先：①笠間ラインガルテン

②水戸市植物公園

③小吹施設園芸組合（温室団地）

④みずほの村市場（農産物直売所）

視察者：地域振興策検討委員会委員：3名、関係市町職員：2名、事務局等職員：8名（コンサル2名含む）、吉田地区参加希望者：3名

1. 笠間クラインガルテン (10:40~11:30)



【説明】

■施設の概要

- 笠間市は、平成 18 年 3 月に合併した。人口は 77,000 人。笠間焼き、美術館などの観光の町。果樹栽培が盛んで、栗の栽培面積と農家数は日本一である。
- 総合計画において「住みよいまち 訪れてよいまち 笠間」を掲げ、豊かな恵みを実感できる農林業を振興。グリーンツーリズムなども実施している。
- 観光客が訪れる一方で、人口流出や高齢化、農地の荒廃が進む。地域住民と都市の住民が農業を通して交流し、地域の活性化を図ることを目的に、他地域に先駆けてクラインガルテンを整備した。クラインガルテンとしては、全国で 4 番目、関東では最初に整備された。
- 平成 6 年度に市職員の提案で着手し、7 年かけて農園施設、直売所が開設、平成 14 年に全体オープンした（詳細は添付資料のスライド 4 を参照）。調理設備（楽農工房）も整備しており、教室や、農産物の加工なども行われている。
- 場所は、以前は桑とタバコを栽培していた農地を借地して整備したもの。現在も地目は「農地」であり、宿泊施設も「納屋」の扱いとなっている。このため居住（住民票を置く）ことはできない。
- クラインガルテンは、都市生活のために菜園をもてない人を対象に小規模な菜園付き

の住宅を貸与するもの。人口減少傾向にある市の状況下、クラインガルテンの利用を機に、移住へとつなげられればと考えている。



■運営状況

- 年間利用料金は、クラインガルテン（宿泊施設付き）が全 50 区画で 1 区画 411,420 円（光熱費は別途、設置されたメーターで各々が支払う）、日帰り市民農園が全 50 区画で 1 区画 10,280 円。堆肥や農機具の修理代はこの中に含まれている。
- 平成 26 年 8 月に常陸農協が指定管理者となった。従業員は 11 名で、60 歳前後が多い。若い人も 2 名程度。全て地元からの雇用である。
- 指定管理の範囲は、クラインガルテン、蕎麦処、直売場の 3 つで、収益はクラインガルテンと日帰り市民農園の利用料金と、蕎麦処、直売場の売上げである。市からの委託費はなく、市の支出は修繕費程度である。

■利用状況

- クラインガルテンの利用規程は以下の通り。
 1. 笠間市民と積極的に交流をもてる者。
 2. 笠間クラインガルテンの年間活動プログラムに参加する意志のある者。
 3. 宿泊を伴う活動により、充実した菜園を目指す意志のある者。
 4. 市民農園区域における公益部分の共同作業（年 4 回程度）に参加できる者。
 5. 3 組以上の家族またはグループでの共同利用ができる者。
 6. 宿泊施設付き市民農園利用規程等を遵守できる者。
- 利用期間は最長 5 年（市民農園法で規定されている期間を採用）。
- クラインガルテンは、現在は全て契約済み。
- コミュニケーションをとることが目的であり、滞在中と引き上げ時は事務所に声をかけることをルールとしている。地元の方の指導による体験実習や、クリスマス会等の年 4 回のイベントと、必ず参加してもらう園内イベントを年 4 回実施。その他に、地元の交流につなげるため、日曜朝のラジオ体操や周辺ウォーキングも毎週実施。農作業のない冬場も教室等を企画して利用を促している。利用者の自主的な活動も活発で、

周辺住民を招待したバーベキューや、車で約 10 分のところにゴルフ場でのゴルフコンペなども開催している。

■ あいあい農園について

- 平成 23 年には、サポート付きリゾート農園「あいあい農園」が隣にオープンした。管理組合が運営管理する 30 区画の農園で、年間使用料は 1 区画 6 万円。オーナー制で、農作物を管理組合に作ってもらい、収穫だけを楽しむ趣旨。収穫の時期にイベントを開催して、楽しんでもらう。笠間クラインガルテンは協力という関係。

【質疑】



■ 苦労した点

- 塗装、エアコンの交換等の修繕費がかかる。雨どいがないので、雨の跳ね返りがラウベ（小屋）の腐食の原因になっている。
- 応募の確保が課題。今年は 19 件の応募があったが、年々減少している。現在は唯一の PR がホームページであるが、その他の PR が必要。近年は東京で開催される移住交流会等に出展している。



■利用者の状況

- 田舎暮らしを紹介するサイトなどから、ホームページで探して来られるようだ。笠間クラインガルテンに決める理由は、東京の人は、交通の便がよいこと（2時間以内）、地域景観（山郷、見晴らし）を気に入って、などが理由となっている。
- クラインガルテンは、現在は各県に1～2個は整備されている。茨城県内にも3つあるため、特徴を出す必要がある。ここでは独自に、「交流」をキーワードに差別化を図っている。退職後のコミュニケーション機会の創出などで、夜のラウベでの飲み会を楽しみに利用している人もいる。
- 介護、転勤等の事情で1～2年で出る人もいるが、5年満了で出る人が多い。利用者の満足は得ているようで、5年以降も、新規と同じ条件で申し込めば利用できるようになっている。現在の住民も5～6組は再申請の人がいる。
- クラインガルテンの利用を機に笠間市を気に入り、貸家を見つけて住みたいという人もいる。しかしながら、借家は50坪程度の大きな家が多く、大きな家はいらないという理由でまとまらないこともある。空き家バンクもあまり機能していないようである。地元の人で紹介で借りている人が1名いる。

■利用条件の設定理由

- 3組以上の共同利用としたのは、誰も訪れずに放置される期間を少なくするため。力作業も各自でやってもらう必要があるので、夫婦等での応募が望ましい。グループで申し込むことで、周知効果もある。
- 交流が目的なので、出席簿でチェックし、参加してもらえない人や農地の管理状況が悪い人にはイエローカードを出して注意している。具体的には、近隣のゴルフ場の利用を主目的にして、農園を利用しない人などがいた。

■離農・耕作放棄地対策の状況

- 笠間市では、果樹産地強化支援事業（栗苗植栽事業／梨苗植栽事業）を実施。栗、梨の安定生産に向けて、苗の更新、苗木の購入を助成している。
- 国の政策の下、飼料米、営農組織を作って放棄地の解消を勧めているが、クラインガルテンが放棄地対策に貢献できている状況までには至っていない。

■直売場の状況

- 野菜は、地元の生産者が持ち込んでいる。笠間市では、野菜は比較的何でも栽培できる。今はイチゴが多く、組合を作って販売している。ブルーベリー組合もあり、ブルーベリー狩りは笠間クラインガルテン（指定管理者の常陸農業協同組合）が申込窓口となって受け付け、農園を訪問してもらっている。
- 野菜の値段は出荷者が決めている。売れ残りは出荷者が引き取りとなる。
- 楽農工房（調理設備）で作られた季節の農産物を使った加工品も販売している。
- 直売場の利用者は主に周辺の住民で、近隣にある団地の人はスーパーを利用することが多い。車に乗れない近くの方は利用している。連休等にメインの通りが渋滞するため、裏道を通る人が利用したり、たまたま立ち寄り人もいるが、市内の観光ルートからは外れている。市内にも農協の直売場が2件あるのでそちらに行く人が多く、平日は閑散としている。市中心部から離れているので、合併後の市民は存在すら知らない人もいる。
- クラインガルテンで栽培した野菜も、年1回、七夕祭りで販売できる。お祭りに来た人が購入している。



■栽培講習会

- 地元の農家（元学校教諭）に、農業を教えていただいている。

2. 水戸市植物公園 (13:20~14:20)



【小吹清掃工場について】

- 昭和 59 年稼動。処理能力は 390t/日 (130t/日×3 炉)。水戸市ではごみ処理主体を 3 区分しており、そのうち水戸地区として、水戸市民の約 8 割、24,000 人分の可燃ごみ、年間約 118,000 トンを焼却している。
- 回収エネルギーの利用は、場内消費電力の発電と大型熱供給。
- 清掃工場が管理する余熱供給センターで、清掃工場からの低圧蒸気を熱交換器により温水に (105℃) に変換して、各余熱利用施設に供給している。(供給先：温水プール、植物園、大浴場付集会施設、園芸施設、清掃工場事務所)

【説明】

■施設の概要

- 昭和 62 年に開園し、平成 6 年までかけて少しずつ整備していった (昭和 63 年:売店・熱帯果樹温室完成、平成元年:薬草園整備、平成 6 年:植物館開館)。平成 28 年 4 月 29 日で 30 年目を迎える。
- 敷地面積は 8ha で、テラスガーデン、鑑賞大温室、熱帯果樹温室、博物館、芝生園、ロックガーデンなどで構成される洋風庭園。鑑賞大温室は、平成 63 年に日本造園学会賞を受賞。

- 清掃工場の余熱利用を目的に、温浴施設に続いて整備された。



■運営状況

- 単市の植物園のため予算が少なく、職員 5 人、嘱託 3 人。園内の管理は民間に委託している。
- その他、目的に応じたボランティアを立ち上げている（薬草ボランティア、花と緑のボランティア、イングリッシュローズ手伝い隊など）。楽しく学び、イベントがあり、友達ができるなど、生きがいと学習力を高める工夫が継続のポイントとなっている。
- コンセプトは「植物園＋庭園（ガーデン）」。箱物は作れても、いかにソフトを作るかが重要なポイント。
- 入館者数は 5 万人／年。当初は 15 万人の入館者数を記録したが、県内には植物園も多く、常陸海浜公園などの施設も建設され、そちらに流れている。30 周年を機にイメージチェンジを図り、次の世代につなげたいと考えている。
- 使ってもらえる植物園を目指し、多数のイベント、教室、フリーマーケット等を開催している。植物館では講演会なども開催している。
- 直営（指定管理者制度ではない）。直営の植物園は全国でも 3 箇所くらいしか残っていない少数派だが、直営ならではのサービスができる。



■余熱利用状況

- エロフィン管※により鑑賞大温室、熱帯果樹温室を加温。設置後 30 年経過し、配管の老化が顕著。十分な予算がつきにくい中で、メンテナンスをしながら使用している。万が一のためのバックアップとして、ストーブも準備している。
※エロフィン管：管内に熱源（蒸気・冷水・温水等）を流し、管外の気体（空気）を加熱または冷却するもので、パイプ外面にフィン（リボン）を螺旋状に巻きつけ、伝熱面積を増大させたもの。
- 水戸は寒いので、別世界としての温室はよかったと評価している。地域性を踏まえ、適したものを考え出すことが重要。
- 東日本大震災で余熱供給が中止され、ボイラやストーブで凌いだ経験を踏まえ、余熱があるからこそ運営できる施設であることを実感している。



3. 小吹施設園芸組合 (14:45~15:15)



【説明】

■施設の概要

- 昭和 62 年に 10a (1,000m²) ×10 棟の温室を整備。敷地面積は 1.4ha。現在はトマトの水耕栽培を実施。(なお、余熱を供給しているもう 1 箇所の農業団地 (1.3ha) では、パプリカを生産している。)
- 近隣農家 5 人で組合を設立し、運営している。整備費に関しては、7/10 程度を国の補助で、残りを組合が負担 (約 2 億円)。
- 清掃工場までの距離は直線で約 400m。105℃の温水が清掃工場から配管で送られ、熱交換器を介し、80~65℃の状態各施設に温水として熱を供給している。
- 清掃工場から園芸施設敷地までの供給管を市が整備。施設内の熱交換器や配管は組合が整備。
- 熱の供給量は、「外気温が-11℃のときに 20℃に保てる」ことを条件として計算。
- 清掃工場の定期点検中は、熱供給は止まるが、その時期を夏季にしているため、熱供給が必要ないようになっている。
- 施設内の熱供給管は当初埋設していたが、メンテナンスのしやすさなどから、現在はむき出しにしている。



■ トマト栽培

- 昭和 62 年当時は地植えのメロンとトマトを生産していたが、メロンの連作障害等もあり、平成 18 年からはトマトの水耕栽培のみとした。このため、供給される熱は培養液の加温には利用できないため、灯油を焚いている。
- 8 月に定植し、11 月中旬から翌年 7 月にかけて収穫。室温は、昼間 25℃、夜間 13℃に設定。
- 1 棟の出荷額は年間 400 万円程度。今年は暖冬だったため、他地域の路地物が 11 月まで出回っており、出荷時の価格を低く設定せざるを得なかった。



■ 清掃工場の移転後の予定

- 4 年後の移転に備え、代替の加温設備を入れるか、熱を使わない別の作物にするか検討している。

4. みずほの村市場 (16:30~16:45)



■施設の概要

- 味の良い安全な農産物の提供をコンセプトに設立された純民間の農産物直売場。
- 全国直売所甲子園 2013 優勝（農林水産大臣賞受賞）
- 野菜のほか、お肉や加工品、花卉も販売。日常的な食材の種類も豊富に揃っている。
- 価格競争を避けるため、新規出品者は、それ以前の出品者の価格を下回ってはいけないというルールがある。
- 年間利用者数 25 万人。売上高は年間 6 億円。（平成 20 年実績）
- 近隣に大規模なショッピングモールがあるにも係らず、多くの人に利用されている。
- みずほ会員制度を導入。会員数は 1 万三千人（平成 20 年実績）で、概要は以下の通り。
 - ①年会費 1,000 円。
 - ②10%割引：購入金額ごとに 10%のポイントが加算され、1000 ポイントたまると、1000 円割引。
 - ③プレゼント進呈：入会時に 500 円相当のプレゼントを進呈。

